

---

# Blue Sky Fantasia

kawajanz

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Blue Sky Fantasy

### 【NZコード】

N1179M

### 【作者名】

kawa.jan

### 【あらすじ】

天空都市（魔術師の街）にひょんなことから迷い込んでしまった青年と、天空人でオタクで腐女子な女の子が織りなすファンタジーなラブストーリー。

天空の秩序を守る厳しい誓約の存在。<sup>ゲッショウ</sup>その誓約が一人を接近させる。見えない鎖で繋がれて距離がぐっと縮まつた二人。愉快で不思議で波乱に満ちた二人の共同生活が始まった。

## 導入

偶然は必然なのだろうか。

不可能と思われた事象が起こったとき、人はそれを偶然という。しかし、現実というのは我々が生きるこの世界一つしかないはずだ。答えが一つしかなければ、過程がどうであれ起こった出来事は必然。事実は曲げることができない。

それでも、信じられない現実に直面することは経験があるのではないだろうか。心霊現象、奇跡、運命の出会い……。科学的には実証できない、特別な経験をしたことはないだろうか。

ある青年がいた。『よく普通の家庭で生まれ、よく普通の学校生活を送り、よく普通の社会の中で育つた。非現実とは無縁の生活。一瞬にして、彼の世界は一転する。

それを偶然と呼ぶのか、それとも必然と呼ぶのか。どちらにせよ、偽りのない事実だけが彼の人生の記憶として残るのだ。

何が起こるか分からぬ。だから人生は面白い。

これは、一人の青年と彼を取り巻く愉快な仲間達が奏でる幻想曲。時に現実は夢をも超越する。

## 導入（後書き）

初のオリジナル作品です。普段は、TYPE-MOON・オーガスト・キヤラメルBOX作品の二次小説を書いています。興味がある方は私のサイトに遊びに来てください。私のサイト内でも、この小説は掲載する予定です（10万ヒット達成時から掲載予定）。

筆者が重度の型月ファンつていうことで、結構型月の世界観が反映されると思います。そして、夜明けな・おとボク好きでもあるのでその辺の要素も含まれるんじゃないかなー。

とりあえず言えること・・・一生懸命頑張ります！――！

# 第一章 Prologue 「はじまりは突然に～Side ???～」

アツイ……。地上の夏はどうなってるの?日本の中空で停留するつて言つたから降りてきたのはいいけど、何この殺人的な暑さは?それなのに入人がウジヤウジヤいるし……。長老に、天空界にも秋葉原を造つてもらうように提案しようかしら。全く、アキバ系の天空人は不便で仕方がないわ。年に数回しか来れないしね。最近じゃあ、新作が短期間で出すぎちやつて何往復もしなくちゃいけないんだもの。面倒よね。通販じや天空に届かないから行くしかないし……。

さて、両腕とリュックにはち切れんばかりの同人誌を持つて帰宅しようとしている。もう三往復目だ。あと一往復は必要だろうなあ。……ああ、溶けそうだ。アイス、食べたい。

時空間移転カード、通称テレポンカードを、天空人が設置した公衆電話に差し込む。今どきの若者が公衆電話を使うなんて怪しいにもほどがあるけど、帰るために仕方がないのだ。まあ、天空帰宅用の公衆電話(通称テレポン)は、認識阻害魔術で守られていて、不気味で絶対誰も来ないようなところに置いてあるから、普通人が気づいて天空に来ちゃうことはないのだ。

「ポイントヒ、エリア245-Bに接続お願い  
「了解しました。5分後に接続します」

よし、これで5分後にウイーンってなつてピカッとしてショイツと天空に到着する。まあ、あと5回繰り替えすんだけど……。

……しかし、この5分間つて淋しいし暇なんだよね。友達がいれ

ば楽しいんだけど、女の子でオタクってアルテミス（第三天空都市アルテミス）だとわたしだけだし……。肩身が狭い。だけどさ、なんだかんだ言つて皆わたしが買つてきた同人誌とかマンガとかラノベを読みに来るし……って、わたし良い様に使われてない?というか、よく考えると皆オタクじゃん!腐女子の巣窟アルテミス。そんなことを言つたら、長老にしばかれるな。

### 「システム起動」

さて、帰つたらアイスでも食べて一休みしてから灼熱地獄に戻らうかな。

…………ん?なんか視界に人影が映つたよ。げつ、同世代くらいの男の子が警官一人に追われてるし……。というか、こいつて行き止まりじゃなかつたつけ?アイツこいつに向かつて走つてきてるけど大丈夫なの?とりあえず、知らないふりをしようと。どうせすぐテレポするし。

…………あれ?男の子こっち来てるんだよね。まずくね?どんどんこっちに迫つてくるよ。ヤバイつて、今日合つた。認識阻害はどうしたのよ!うわつ、コイツ入つてきやがつた。どうしよう……。ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバ——イ!

そして、ピカッてなりました。なんかこの瞬間、色々終わつた気がする。どうなつちやうの、わたし?

# 第一章 Prologue 「はじめは突然に～Side ???～」（後書き）

一人の名前が気になるって？

ノンノン、焦っちゃダメですよ。

次は主人公の視点で始まります。 基本は主人公視点で物語は展開されますよ。

## 第一章 Prologue 「思わぬ出来事」

あちー。あー、あちー。

太陽光が容赦なく照りつける秋葉原の街で、俺は買い物をしている。いつもなら外なんて絶対出ようとすら考えない。引きこもりでニートな俺は、家でパソコンに向かうことを唯一の生き甲斐にしている。しかしあま、今日はどうしても外せないイベントがここであるわけで、それまでの間は買い物でもしようと秋葉原の街を歩いているわけだが、元々体力のない俺は既に限界を迎えていた。

「公園にでも行くか……」

どつかその辺の喫茶店、もしくはジャンクフード店でもいいのだが、人混みが大嫌いな俺は、休日でも比較的静かで人もいない、この公園が密かにお気に入りなのだ。

えっと、俺はベンチで休んでいるわけだが、イベントまで手持ちぶさたになつたので、俺の人生の反芻でもしようかと思う。

俺こと篠宮雄伍は、ごく普通の家庭に生まれたと思う。両親は共にジャーナリストで、各地を転々とする毎日だったが、俺はばあちゃんどじいちゃんに育てられてすぐすくと育つていった。両親も時々帰つてきたし、俺にはばあちゃんとどじいちゃんという育ての親がいたから小中と何の問題もなく幸せな子ども時代を送つてきた。そんな生活も中学3年の冬を転機に変わつてしまつ。ばあちゃんが蜘蛛膜下出血で突然他界してしまつ、そしてばあちゃんの後を追うようにして3ヶ月後にじいちゃんが虚血性心疾患で死んでしまつた。それからの俺の人生は惰性でしかなかつたと今にしてみればそう思われるをえない。俺は親戚と共に暮らすことを悉く断り、両親とも仲違いして、一人暮らしをはじめることになった。最低限の生活費は両親が負担してくれたが、バイトをしなければ最低限の生活も送

れない状態だつたので、高校に通いながらもバイトに明け暮れる毎日だつた。無事高校を卒業したが、一浪し、何とか大学に進学した。大学の一年目こそ、それなりに勉強して単位もそこそこ取っていたが、2年目で挫折し留年して、大学2年生のまま21歳の夏を迎えていた。高校時代に汗水垂らして生き甲斐のように頑張ってきたバイトも去年辞めてしまった。今はもう、家に引きこもって同人誌を書き、ダウンロード販売をして生活費を稼ぐようになってしまった。パソコンがなくなつたら死んでしまうんじゃないかなあと思つほど、俺はパソコンに依存している。

思い返すだけで憂鬱になる。無気力になつていて自分を戒めるためによく人生の反芻をしてみるが、最近では心の変化が顕れることもなくなつてしまつた。きっと今日も今まで通りに一日が過ぎていくのだろう……。

ふと、ベンチの横に紙袋が置かれていることに気づいた。中には何か入つていてる。きっと誰かの忘れ物だらう。普段なら全く考えないことだが、なぜだか今日はこの紙袋を交番に届けようと思つた。うん、もしかしたら自分の人生を振り返つたおかげかもしれない。とにかく、早いところ交番に届けて、イベントに参加して帰らう。

交番で、忘れ物を届け書類への記入も済ませた。うん、我ながら良いことをした。今日は、久しぶりに気分が良い。思ったより早く交番でのやり取りが済んでしまつたので、俺は秋葉原の裏路地を散策してみることにした。普段は用事だけ済ませて帰つてしまつから、裏まで行こうとしたことはない。よく見ると、変な店が沢山ある。歩いているだけでなんだか新鮮で楽しい気分になる。

ただ、なんとなく秋葉原の街がざわついているような気がした。俺が良い気分になっているのとは裏腹に、秋葉原の空気に違和感の

ようなモノを感じる。何なんぞうなあーと、楽観的に考えていたのもつかの間、事件は起こつた。

意気揚々と裏路地を歩いていた俺の横をパトカーが通り過ぎた。かと思えば、すぐに停車し中から一人の警官が出てきた。俺はぼう一ひと二人を見ていた、そして「一人と曰が合つと警官達は俺の方に向かつて走ってきた。周りには誰もいない。警官達はどう考へても俺の方に向かつて走つてきている。俺は、自然と走り出していた。警官達から逃れるように、秋葉原の裏路地を全速力で駆け回った。

「なんなんだよ……ちくしょうーー！」

もう俺はよく分からず、とにかく走つて逃げた。冷静に考へれば、俺は何も悪いことをしていのだから逃げる必要なんてなかつた。でも、体が勝手に動き出した。一度逃げてしまつたら捕まるまで逃げ切らぬといけない。そんな思考で頭の中は一杯だつた。

足の速さには自信がある。しかし、相手は警察官だ。引き籠もりの大学生の俺が体力で勝てるはずがない。もう追いつかれる。そんなとき、普段は気にもとめないような細い路地が目に入つた。行き止まりの看板が立つてゐる。だから、今の状況を考えれば絶対に入つてはならないそんな道。しかし、俺の直感が叫んでいる。

『入れ！どうせ捕まるなら、入れ！』

ああそうだ、こういう時の俺の直感は信じて裏切られることがない。大学受験の時もそうだつた。直感を信じずに解答して、俺は現役時代のセンター試験で大失敗したのだ。そつだ、今は常識よりも俺の直感を信じよう！

行き止まりの路地に入った。50mほどの長い直線で、案の定行き止まりであった。しかし、予想外のモノが視界に入ってきた。道の奥に、公衆電話ボックスが見える。そして中には、女の子が入っていた。

『あの女子に助けを求めるんだ!』

なんだか吹っ切れた気分だつた。もう何百mも全速力で走って、限界をとっくに超えている身体も、最後の力を振り絞つた。ああ、あとちょっとだ。後ろを見ると警官達も10m後ろぐらいで迫ってきている。

『行ける!—!』

俺は電話ボックスに手を伸ばし、中に入り込んだ。そして、視界が真っ白になつた。

## 第一章 Prologue 「思わぬ出来事」（後書き）

女の子の名前が気になるって？

ノンノン、焦っちゃダメだつてばーちゃんと次話で教えますから。

それで、紙袋の中身。

何だったと思いますか？私も分かりません~~~~

恐らく、拳銃か覚醒剤でしょうな。警察が血眼になつて捜すのも無理がありません。というか、主人公の不幸っぷりは半端ないって伝われば幸運。

でもまあ、天空人の女の子に出会つちゃったわけだから、逆にあり得ないほど幸運ですよね。まあ、この後の話は抜きにして~~~~

感想・意見があれば気軽にください！あと、サイトの方にも遊びに来てくださいね！！

## 第一章 Prologue 「天国」

田を開くと、そこには美しい庭園が広がっていた。花の香り、水のせせらぎ、爽やかな空気。

「まさか、俺……」

先ほどまで秋葉原で買い物をし、なぜか警官一人に追われていた俺は、見知らぬ場所で倒れていた。

「……死んじゃつたのか」

あの後俺は、警官に銃で撃たれて死んでしまったのだろうか。だとすれば、なんて儂い人生だったのだろう。けれど、ここが天国なのであれば俺の人生も間違いじゃなかつたってことだ。

「天国に来れて嬉しいけど、俺さ……もっとやりたいこと沢山あつたのに」

考えれば考えるほど寒感がわいてくる。ああ俺、死んじゃつたんだ。彼女もできないで、コミケに参加もできないで、人生でやり残したことが山程ある。今更嘆いても仕方がないけど……。

「死んじゃつただなんて……信じられないよ」

自然と涙が出てきた。俺の人生は辛い人生だと思つてた。死にたいと考えたこともあつた。だけど、こうして自分が死んでしまうという状況に直面して、俺は悲しさと悔しさで泣き崩れている。もし嘘なら誰か嘘だつて言ってほしい。

「……アンタ、死んでないわよ」

「……うわあ！」

背後から女性の声がして、慌てて振り返ったがそのままバランスを崩して女性の上に覆いかぶさるように倒れた。

“フニッ”

人生で体感したこともないような柔らかい感触。ああ、やつぱりここは天国なんだ。

「……ひゃあーどこ触ってるのよ、変態！！」

“バシン”

物凄い力で俺は顔をひっぱたかれた。

激しく痛い……痛いぞ。

「天国つて痛覚はあるんだな」

「何バカなコト言つてるのよ。早く退きなさい、変態！」

“グフツ”

強烈な右フックが俺のボディーに炸裂した。ボクサー顔負けの電光石火な一撃だった。俺はそのまま左に倒れこみ仰向になつた。

すると女の子は俺の腹の上に乗った。それで、見えてます……  
ミニスカートから覗く純白のパンティ。やつぱり、天国つてす”。

「 もちろん、ひょっと、ギリ見てるのよーー。」

“ズドンッ”

女の子の拳が鈍い音を立て鳩尾にのめり込んだ。

「 がはっ …… 」 ほつ …… ほつ …… 」 あつ

「 ありや …… 大丈夫？」

やりすぎたかつていつ顔をしながら心配そうに見つめてくる女の子。今更ながら彼女の顔をじっくり見る。そして、思った……。

「 お前 …… 可愛いな」

「 なつ …… 変態ヤロウー。」

“バシイーーーン”

手加減なんて概念は一切含まれないビンタだった。

「 …… あつ、ごめん」

いや、今更謝られてもな。

「 いい思こさせてもらつたし、その代償としては少なべりこだ。  
天使さん …… いや、女神さまか …… 」

「こんな美人がいるなんて、天国つてすごいところだと思つ。

「わたしは天使でも女神でもないわよ。ただの人間。まあ、アンタたちと違つて魔術が使えるけど…」

「……いや、だつてここ天国だろ?」

「だから違うつて言つてるじゃないのーちゃんと説明してあげるからおとなしく聞きなさいー!」

「……はい」

なんか俺、初対面の女の子に怒られます。

「まず、アンタ名前は?」

「俺は篠宮雄伍。キミは?」

そういうえば彼女の名前も知らない。

「わたしの名前はアレカ。天空人には姓は無いの。だから皆正式には、得意な魔術を頭に付けて呼び合うのよ。因みにわたしは『水のアレカ』よ。よろしくね、ユウ!」

アレカさんは、初めて俺に笑顔を見せてくれた。やつぱりべらぼうに可愛いかった。

## 第一章 Prologue 「天国」（後書き）

眠いです。とりあえずひらしました。

えっと、二人の出会いのシーン。まあ正式には秋葉原の電話ボックスですけど……。

うーん、シンデレラとはちょっと違う感じかな。ちょい暴力的で、でもすこしく優しい女の子。素直になれないところが可愛らしいですね。『水のアレカ』さんと名付けました。えっと、名前はもの凄く重要なので、もしかしたら自サイトでの発表に合わせて変更する可能性もあります。そしたら「めんなれこ」。

## 第一章 Prologue 「処罰」

「ところでアレカさん、じるべー？」

そんな俺の質問にアレカさんはまず驚いたような顔をした。そして呆れたような動作をしたかと思うと、頭を抱えてしまう。

「……………そうだった。コイツ、地上人だった」

「コイツとな……。せめて名前で呼んで欲しい。

「俺のコトは雄伍って呼んでくれないかな？アレカさん

「あつ、じめん。わたしのこともアレカでいいわよ」

思わず形で親密（？）になつたところで、再度質問した。

「それでア…アレカ、じるべーなんだ？」

「天空都市アルテミスよ」

はて、天空都市とな……。

「それって、天国とは違つか……」

「違うわよ！わたしたちは、言ってみれば貴方達と同じ人間だし、ここは地上と同じ土壤や水で構成されているわ。元々地上にあつた島をじつそり掘り起こして古の魔術で浮遊させたのを雲で隠しているから、地上と大して変わらないのよ」

つまりは……。

「島が浮いてるってことか」

「やうじゅう」と

でも、島が空中に浮かんでいるとしたら地上からは見えないにしても、飛行機からとか人工衛星からとかだつたらばれてしまうんじゃないだろうか。

「島がまる」と浮いてるなら、なんで俺たちに見つからないんだ?」

「ああ、それは認識阻害結界のおかげなのよ。わたしたちの天空都市は、ドーム状のシールドに覆われているの。人の目、機械の目すら欺く認識阻害魔術が働いていて、レーダーですら見つからないようになつていいのよ」

「凄い。聞いているだけで、心が躍る。俺が求めていた非常はまさにここにある。」

「んで、どうして俺はここにいるんだ?」

「なつ……それはわたしが聞きたいわよ!なんで、認識阻害がかかつたテレポんに地上人が入つて来れるのよ……アンタの所為で、大迷惑よ。ああもう、どうしてくれるのよ……」

「どうやら琴線に触れてしまったようだ。アレカはパニック状態に陥っている。周りが見えなくなるほどに……。

「そつじやな、相応の処罰は受けてもらわねばならぬのう」

「……つー長老」

アレカは人影の存在に全く気付いていなかつたようだ。

「神眼のダモンじや。アルテミスの長老をやつておる。宜しくのう、  
青年」

ダモンと名乗る老人は俺に手を差し出した。慌てて俺も手を出し握手する。

「さて、アレカ。お主がしてしまつたことはわかつておるの」

ダモン長老は、その表情こそ柔和で優しそうであるが、声と言葉には有無を言わせぬ迫力がある。

「……はい。掟を破つたわたしは、相応の誓約を負わせていただき  
ます」

アレカの悲痛な声。恐怖心に支配され、絶望に満ちた表情をして  
いる。

「偶然とはいえ、地上人をこのアルテミスに連れてきてしまつたの  
は大罪じや」

ダモン長老の声は落ち着いていた。

「アルテミス法第四十五条違反の罪で、水のアレカと地上人の青年  
は強制的にアルテミス第七誓約を執行してもらおうかのう」

「ひとつ俺たちの運命を変える判決が下ったのである。

## 第一章 Prologue 「処罰」（後書き）

第三天空都市アルテミスはギリシア系です。

設定は物語内で小出しに説明しますが、天空都市についてちょっとと説明します。

アルテミスが第三つでいうくらいですから、天空都市はたくさんあります。

例えば、

第一天空都市アトランティス

第一天空都市ニネヴェ

第三天空都市アルテミス

第四天空都市コウケイ

第五天空都市ペルセポリス

第十八天空都市ヤマト

人種も民族も様々で、天空都市によつて文化の特色も違います。まあみんな基本混血なんですけどね。

そんなわけで第1回kawajanzの魔術講座でした♪

次回は誓約の内容が明らかに！！

## 第一章 Prologue 「第七誓約」

「第七誓約ですか？！あの誓約は問題があくまでおよそ700年間執行されていなはずです！アルテミス法第四十五条であれば第二十四誓約か第二十四～二十六誓約が適切なはずです。第七誓約だなんて……」

アレカは先ほどまでの悲痛な面持ちとは正反対に、声を荒げてダモン長老と対峙している。

「ワシの弟子とは思えん発言じやな。がっかりじや……。本当にお主は、第二十四～二十六誓約が適切じやと思つておるのか？」

「はい。だつて地上人の侵入及び侵入加担があつた場合は、天空人と地上人の隔離を考えるのが第一じやないですか！だつたら、第二十四誓約の『記憶消去』、第二十五誓約の『天空からの永久的追放』、第二十六誓約の『永久的な地上への降下禁止』が適切なはずです。間違つてないですね」

アレカは真剣な表情だ。ただ、俺としてはアレカの表情よりも二人の会話が気になる。記憶消去やら永久追放やら、凄い単語が飛びかっている。

「そうじやの。確かに、地上人の侵入及び侵入加担の場合はアレカの言つ通りじや。じやがの、今回は事情が違うじやろ。その青年が天空に来たのは故意ではなく、偶發的なものじや。それにのう、もつと重大な違いがあるのじやよ。気付かぬか、アレカよ」

「……わかりません」

ダモン長老は深く溜め息をつき、話を続けた。

「よいか、これまでアルテミス法第四十五条違反を犯した者は地上人でも魔術師なのじや。それが今回は、普通人の地上人が天空に迷い込んできたという特殊なケースじや。723年ぶりの大事件なのじやよ。そんなことにも気付かぬとは、アレカもまだまだ勉強が足りぬの」

「そうダモン長老が言い終えると、アレカは黙ってしまった。そんな中で今度は俺が口を開いた。

「あの、先ほどから聞いていますけど、第七誓約って一体どんな誓約なんですか？」

「ほれアレカ、青年が第七誓約についての説明を求めておる。答えなげなさい！」

「……第七誓約だなんて、そんなの…わたし……やっぱり考えられないですよ……普通なら絶対第一十四誓約で……」

「つべこべ言つとらんで、説明せぬか、アレカ！」

ダモン長老の叱責に、アレカは「…はい」と答え、俺の方に向き直った。

「第七誓約はね、二人の人間に適用されるの。魔術によつて、一人を見えない鎖で繋いで誓約が有効な限り二人が離れられないようにするのよ。一人が半径5メートル以上離れてしまつても、一定の時間が経つと一人がもう一人の下へ強制的に瞬間移動させられるよう

になる。もう何があつても一人は離れる」とができない。そんな誓約よ

アレカの説明を聞き、情報を整理する。つまりだ、今回第七誓約が適用されるのは俺とアレカなわけで……。

「俺はアレカと四六時中一緒にいることになるってことか?」

無意識の内に、頭の中で出た結論を口に出していた。

俺とアレカが離れられない。離れてても強制的にアレカのもとに連れもどされる。俺とアレカがずっと一緒に。一生一緒に。これからずっとアレカと共同生活……ん？共同生活……。アレカと俺が共同生活……。

ええええええええええ――――――――――――――――

思わず俺は叫んでいた。

## 第一章 Prologue 「第七誓約」（後書き）

ちょっと、物語序盤は説明だけで退屈かも知れませんね……。

でも、もの凄く重要です。特に今回の話は……。

天空人特有の法制度に、<sup>ゲッショウ</sup>誓約つていうのがあって、いわゆる我々の制度で言つ刑罰のようなものです。

誓約は、魔術によって法を犯す者に対して執行されて絶対に破れなイシステムが永久的に稼動するつてモノです。魔法ですから、年中無休で犯罪者に適用されるわけです。

僕が思うにこれは、刑罰よりも質が悪いと思います。

刑罰は刑務所に入る、もしくは罰金を払えばそれで済みますよね。

でも<sup>ゲッショウ</sup>誓約は違います。誓約を無効にするための条件を満たさない限り永久的に、<sup>ゲッショウ</sup>誓約はその人に付きまとうことになるんです。

それに魔術だから情け容赦がない……。

誓約を負っている者は、アルテミス法制局で管理されますし、魔術で誓約を解除してもばれてしまつんです。

いや、本当に質が悪い……。

さてさて、ついに二人の奇妙な共同生活が始まります！！

型月S.Sも書かないといけないんだけど……頑張ろっ！

## 第一章 Prologue 「アルテミス住宅街」

ダモン長老と別れ、俺たちはアレカの家に向かっている。2mほど離れ無言で歩く。

既に第七誓約の執行は始まっていた。俺たち二人は、ダモン長老に渡された金属製のブレスレットをしている。ブレスレットには「Artemis 07」と刻まれている。一度付けたら最後、条件を満たさない限り一生外すことができないのだそうだ。ブレスレットを見れば、その人が法を犯したと一目で分かつてしまう。考えてみると地上の制度よりも恐ろしいかもしだい。

俺たちが最初に出会った庭園を出ると、そこは住宅地だった。とはいっても東京のような雑多なものではない。前庭があり、家は広々とした一軒家ばかりが立ち並ぶ、裏庭にはプールが付いている家もある。俺からしてみれば驚愕の光景である。アレカに言つたら怒られるが、やはりここは天国なのではないかと疑つてしまつほどだ。

歩きながら、ふとアレカの顔を見てみた。よく考えてみるとアレカと出会つてまだ一時間も経っていないだろう。それにもかかわらず、俺たちは名前で呼びあい、しかも共同生活まですることになってしまった。そんな彼女は、はつきり言つて可愛い。肩までかかるくらいの黒髪。青眼で肌は白い。身長は俺より少し低いぐらいだろうか。まあ胸をスルーすれば女性らしい美しいプロポーションだ。

「着いたわ。ここがわたしの家よ。お父さんは仕事に行ってて、お母さんは友人と地上に買い物に行つてから夕方までわたしたちだけになるわね。たぶん、第七誓約執行者になったことは伝わつてゐるだろうけど……」

2階建てでプール付きの家。見た目だけで圧倒される。これからこの家で生活することを考えると期待も膨らむが、何せ第七誓約が邪魔して不安だらけで複雑な感情が渦巻いている。

アレカの家の玄関をよく見ると、女の子が3人立っているのが見える。

「アレカちゃん！誓約執行者になっちゃったんだって？お父さんから聞いて慌てて来たの」

黒髪で可愛らしい小柄な少女が心配そうな声で俺たちの元にやってきた。

「Hフイ…」めんね。わたし、誓約執行者になっちゃった

「お前は東京上空に停留すると向回もテレポンを使いつから心配していたんだけど、ついにやつたな。あたしはやめとけって何度も言ったよな」

長身でスレンダーな体に腰まで伸びる金髪を靡かせて、凜々しくハスキーナ声の女性がアレカに向かつて言つた。

「ディオネの注意はちゃんと聞いていたのよ。昔より地上に遊びに行つてないもんわたし。それでも、秋葉原は例外なのよ。アンタ達だって、わたしが買つてくる同人誌を読んでるでしょ？」

「それはアレカさんがどうしても秋葉原に行きたいと嘆んでわたしたちが止めないだけですよ。わたしたちは皆、アレカさんのことを心配しているのです」

そう優しくアレカに語りかける彼女は、桃色の美しい髪をしており清楚な雰囲気を持っている。

「うふ。フロー「も」めん……」

「もう過ぎやつた」とは仕方ないよアレカちゃん。それより、これからのことを考えよう

「Hフイの言つ通りだぞ、アレカ。とりあえず、その青年を紹介してくれ

「ディオネと呼ばれる女性がそつこいつ、全員の視線が俺に向かられた。

「ああ、コイツはわたしと一緒に誓約執行者になった地上人のコウ」「よ」

「篠宮雄伍です。みなさん、どうぞよろしくお願いします」

美女に囲まれてガチガチに固まつた俺は、からかうじて血口紹介し頭を下げた。

「ユウゴさん、よろしくお願ひします。ところでアレカさん、あなた方が執行することになつた誓約は何なのでしょうか?」

「…………」

やはつお互に言い出しあへどのが、一人して言い淀んでしまつた。

「なんだよ。もつ誓約執行者になつちまつたんだから、あたしたちに番号くじこ言つても変わらねえだろ」

そう言つて、ディオネさんはアレカの腕を掴んでプレスレットの数字を見た。

「ほう。第七誓約か……。なあフローラ、第七誓約ってなんだつけ？」

「第七誓約ですか。確か700年ほど執行されていない誓約ですね。一人の人間に執行され、一定範囲以上離れると強制的に一人がもう一人の元に連れ戻されると覚えた記憶があります」

「あつ、わたしもその誓約知つてゐる。一人が一生離れられなくなる『赤い鎖』の誓約だつて聞いたことがあるよ」

エフイさんがそう言つたところで、ディオネさんが俺とアレカを見比べている。

「なあ、それつてつまり……お前ら同棲するのか？」

「…………違うわよ、コウゴは仕方なくわたしの部屋に寝かせてあげるだけよ。同棲じゃないわよ！！」

アレカは真剣に反論していた。しかし、ディオネさんは冷静だった。

「いやアレカ、それを同棲つて言つんだ」

「…………」

アレカ、撃沈。

「アレカちゃん、エツチ」

エフイさんの発言。

「卑猥ですね」

フローラさんの発言。

「淫乱だな」

ディオネさんの発言。

「みんな、何を一体想像しているのよ……！」

“バシイ————ン”

そしてなぜか俺がアレカに思いつきひつぱたかれたのであつた

。……。

## 第一章 Prologue 「アルテミス住宅街」（後書き）

アルテミスの仲良し美少女三人組集結です。

小柄で黒髪エフイちゃん

ナイスボディーな金髪長髪ティオネさん

清楚な桃髪フローラさん

そして我らがドジッ娘アレカさん

四人のやり取りを書くのは楽しいです WWW

## 第一章 Prologue 「トライフルメーカー」

「ひどいです、アレカちゃん。コウゴくんを叩くなんて」

心配そうにHフイさんが俺のもとにやってきてくれる。

「もう慣れたから大丈夫だよ。ありがとう、Hフイさん」

「そりなの?でも、またアレカちゃんに乱暴されたらわたしに言ってね」

Hフイさんとそんな微笑ましいやり取りをしている最中、アレカを見れば終始不機嫌であった。

「これであたしもお役目御免なのか。それはそれで悲しい気がする」

なぜかティオネさんが感慨深そうに咳いでいる。

「何バカなこと言つてるのよ、ティオネ」

「彼氏ができたんだから、いつものようにあたしに突っ込んでたら浮気になっちゃうもんなあ」

「ちよつ……なに勘違いしてるのよ。コウゴの顔がちよつといふころにあつただけよ」

それだけで俺は叩かれたのか。なんだか、理不尽すぎる。

「なに慌てるんだ?アレカ」

「あつ……慌ててなんかいないわよー。」

アレカは『ディオネさん』そう答えて、俺を睨み付けた。

「ふふつ。お一人とも初々しくてお似合いでですよ」

「ちょっと、フローラまで……」

フローラさんにまでからかわれてしまい、アレカは困ったように俺の方にやつてきた。そして俺の耳元で囁いた。

「あんた、あとでわかつてるでしょうね？」

少しの間とはいえ、アレカのことを女神だと勘違いしていた俺は愚かだと思つ……。

「二人で内緒話なんですが、見せ付けてくれるな、お前ひ

「そんなんじやないわよ。部屋の片付けしていくからちよつと待つてて」

ディオネから逃げるよつて、アレカは家の中に入つていつた。

「逃げられたな」

「やうだね~」

『ディオネさんとエフィーさんは楽しそうにして』る。

「 もうでもないのではないでしょ、うか」

その壁のフローラさんは俺の方を見ている。

「 いたな」

「 わうだね～」

「 ディオネさんとエフイさんは、ますます楽しそうだ。」

「 なあ ユウ」「、お前とアレカって駆け落ちか？」

「 ディオネさんは单刀直入にそんなことを聞いてきた。」

「 違いますよ。アレカも言っていたように、俺とアレカは偶然出会つただけで……」

「 じやあ、どうしてユウ君はここに来れたの？」

「 正直理由は自分でも分からなかつた。ただ、ここに来る前の出来事なら鮮明に覚えている。」

「 秋葉原の公園で休んでいたら、誰かが忘れていた紙袋を見つけて警察に届けたんだけど、なぜか俺が警察に追われて、逃げて、気が付いたらここにいたんです。」

「 成る程ねえ、まあ ユウ」「の真剣な様子を見れば嘘には見えないけど、まさか認識阻害を破る人間がいるとはねえ」

「 アレカさんのトラブルメーカーなどいはず、一生治らないんでし

み「うね」

「ははは、違ひなー」

そんな会話をしつこねと、急に体が熱くなつてきた。

「うへ……うあひ」

「じりじりやつたんですね、口かげんへ。」

「体が熱くなつて……」

「ちのですか。アレカさん、間に合せんでしたね」

「……ちだな」

「うわあひ」

“ふしゅん”

もう少し俺は、その場から消えたのであった。

## 第一章 Prologue 「トラブルメーカー」（後書き）

お久しぶりです。……ホントに。

サイトのほうも十万ヒットを突破いたしました。その記念企画として、この小説は書き始めたのですが、書き始めたからには頑張らないとなあ……。

わたくし、気づいた方もいるでしょうか？実は、新作を書き始めました。こつちは、随分しつとりとした感じで、私らしくないのであります。どうぞよろしく……

二次創作のほうも頑張りますよ！TYPE-MOON・AUGUST・CARAMELBOX作品のSSですので、興味がある方は是非！！

そして、この小説の次なる展開は！？

（なんとなく分かつちゃうとは思いますが、期待を裏切れません……たぶん）

## 第一章 Prologue 「衝撃」

次の瞬間、俺は宙に浮いていた。宙に浮いているところひとつもつまみ、落下するしかない。世の摂理に抗おうと魔術行使を試みるが、普通人である俺にできるはずもなく、重力に引かれるままに垂直落下した。

「きやあつー

“ズゴン”

鈍い音を立て、俺は何かの上に乗っかった。

“ふにゅつ”

決して大きいとは言えないが、柔らかい感触が掌から伝わってくる。

この感触は紛れもなく女性のおっぱい……。しかも布越しではなく直に……。直に！？

俺は上半身裸でパンツだけを身に纏ったアレカの上に覆い被さつている。アレカと目が合つた。

「きやあああああああー————！————！————！」

“ズゴオーン”

強烈な右フックが俺のボディに炸裂する。

『うわー飛んでるよー』

と、現実逃避した瞬間に本棚に吊りつけられた衝撃を背中に受け、そして頭上から本やらゲームやらDVDやらが宙のようになに降つてきた。

『ああ、もうダメだ』

意識が朦朧とする。ああ、氣絶しなかつたことが奇跡と言える。恐らく大量の本の中に埋まっているのであるが、視界は闇に覆われている。取り敢えず、生き残っても地獄が待っていることは確定なので口を開じてもいいかなぁーと思つてみると、光が射してきた。

「コウゴー・大丈夫よね、コウゴーー。」

アレカの声が聞こえる。薄ら口を開けると口の前にはパンツしか纏わぬアレカの姿が……。

「コウゴー、しつかりしてコウゴー」

アレカの慌てる声が俺の耳に届いてくる。アレカが俺を本の中から必死に救ってくれる。

「返事して、コウゴー。」

手を俺の背中に回し、支えるように起きてくれる。そして、そんなアレカに向けて俺は口を開いた。

「アレカ……」

「コウゴー・よかつた、意識はあるのね

アレカは俺のことを本当に心配してくれているようだった。だから、そんなアレカに俺は言わなきやならないことがある。

「貧乳も嫌いじゃないぞ……俺」

“ズゴオオオーノン”

凄まじいアッパーをテンプルに食らい、ついに俺は気絶したのであつた。

## 第一章 Prologue 「衝撃」（後書き）

短いですけどひとつあえず投稿しました。

やつぱり俺はシンテレさんが好きらしいですな。アレカが可愛くな  
つてきた気がします。うん、頑張りうー。

さて、ジャンルをファンタジーに移行しました。それだけなんですが  
けど

よーし、ちよっとずつでも連載頑張りますーー！

## 第一章 P r o t o p e 「看病」

田を覚ますと、そこにはエフイさんの顔があつた。

「あつコウゴさん、大丈夫ですか？」

「エフイさん……、俺はいつたい？」

「おひ、勇者が田を覚ましたぞ」

ディオネさんとフローラさんも近寄ってきた。

「あれ？ アレカは……？」

「アレカさんは」ちりですよ」

じつやら俺はべっどに寝かされていたようで、その枕元には洗面器が置かれ、水で濡らしたタオルを持ったアレカが座っていた。

「……ふん」

俺と視線が合つと、アレカはそっぽを向いてしまった。

「あの……アレカさん……」

アレカの態度には、ばっちり心当たりがあつた。俺は、アレカのあられもない姿を田撃してしまい、あろうことか不適切な発言までしてしまった。自業自得といえば、まさにその通りだつた。

「……なによ」

「『』めんな……それと、看病してくれてありがと」

ただ、アレカがきゅっとタオルを握った姿を見て、なんだか感慨深い感情が胸にこみ上げてきた。

「別に、『』も心配して看病したわけじゃないんだから」

すりくアレカが可愛らしく見えた。

「『』も田を覚ましたみたいだし、あたしらはそろそろ帰らつかね」

「そうですね。お一人のお邪魔をしては、迷惑でしょう」

「『』くとも、大事にね」

そう言って、三人は部屋を去ってしまった。俺とアレカだけが部屋に残される。

そして、しばらくの間沈黙が続いた。

「……ねえ『』。わたしの裸、見たの？」

アレカはそんなことを俺に聞いてきた。

「えつ、ああ……『』めん」

「……『』のハッチ」

頬を染めたアレカが一言、そつ呟いた。

「アレは仕方がないじゃないか、第七誓約の所為でだしね……」

「わかつてゐるわよ……だから、アンタのことを責めたりしないわよ」

アレカが少し声を荒げてそう言つた後、俺のほうに向き直つた。

「でも、わたしの裸を見た責任は取つてもうつか」

アレカさん……話が矛盾してます。

## 第一章 Prologue 「看病」（後書き）

すつじく人々のBSFです！！

ツンデレの王道を突っ走ろうと思いますよ。これでもかつてくらいにwww

というわけで、主導権は完全にアレカさんが握りました！！

ユウゴくんはアレカさんにベタ惚れだし、アレカの一人勝ち

つてわけにはいかせませんから！嫉妬するアレカさんも書かないと  
ねwww

少し気まずい雰囲気になつた俺たちだが、今はなんとか雑談ができるほどに落ち着いている。

「なあ、アレカ……俺の着替えとかはどうすればいいかな」

「そういえばそうね。アルテミスがトウキョウ上空に停泊している内にアンタの家に行つた方がいいわね」

「いや、それはまずい……。家の中は、それはもう、エロゲーやラギヤルゲーやら同人誌やらノベやら漫画やらが雑然と転がっていて足の踏み場もないほどである。」

「じゃあ、明日の予定は決定ね。後で長老に相談して、転送装置を貸してもらおうかなあ。やっぱ、そうなるとアキバで買いたい放題じゃん！ 明日は楽しくなりそつー！」

アレカがベッドの上に寝そべりながら足をバタバタさせてはしゃいでいる。非常に可愛らしげ。

「あのわ……喜んでこるとこひい申し訳ないんだけど」

「…………なによ」

「わわわ……凄い形相で睨んできたし……。さつさまでの間にま一つとした弛んだ表情はどうしたんだ？」

「俺……たぶん警察に追われてるんだけど」

「……はあ？」

そりや、そんな反応をするのも当たり前である。自分でも信じられないのだが、こんな現実離れしたファンタジー世界に迷い込むきっかけになつたのも、秋葉原で警察に追われたからなのである。

「公園に置いてあつた紙袋を交番に届けたらさ、血眼になつて警察官たちが追いかけてきてさ」

「それでわたしのいるテレビくんに逃げ込んできたのね……」

「やういう事だ」

事情を説明すると、アレカは「……はあ」と深い溜め息をついて言った。

「それなら直接アンタの家の中にテレビした方がいいわね。長老に頼むしかないわよね」

「こめんな、期待を裏切つて……」

「別にいいわよ。端から期待なんかしてなかつたし……」

いや、絶対嘘だ。

「その代わり、俺の『コレクション』で気に入つたのがあれば持つていつていいからさ」

「えつ、……本当に？」

アレカの瞳が急にキラキラと輝きだした。

「ああ、本当だ」

「えへへ、楽しみだなあ」

再び、ベッドの上で足をバタバタとしながら喜んでいる。アレカも分かりやすいヤツだなあと思つ。

落ち着いてきたところアレカの部屋を見回してみる。凄く広い部屋で、部屋一面が白を基調としたシンプルな色合いだが、可愛らしい装飾も施されていて女の子の部屋って感じがする。大量の漫画や同人誌が棚にびっしりと詰まっているのは、女の子らしさとは言えないが……。

ベッドは一段ベッドで、勉強机も一つあり、それぞれの机にパソコンが一台ずつ置いてある。どうやらアレカには姉か妹がいるようだ。母親と父親は帰つてないだろうみたいな話をしていたからつきり一人っ子だと思っていたのだが……。

そうしてアレカと会話をしていると廊下の方からバタバタと足音が聞こえてきた。そして、ガチャリと部屋のドアが開かれる。

「お姉ちゃんただいまーーー。わあー、お姉ちゃん男連れ込んでるうーーー。」

「ちよつ……入ると起きはノックしなさいよーそれに、どうせアンタはわたしたちの事情を全部知つてるんでしょうがーーー。」

入ってきたのは、アレカよりも少し小柄な美少女だった。

「えー、なんのことかなあ——？」

「とほけるんじゃないわよ。それと、アンタが着ていのその服、わたしのじゃないの！」

なるほど、この子がアレカの妹さんなのか。

「ええと、お兄ちゃんがアレカの恋人のユウ「さん？」

「えつ……ああ、うん……そうだけど」

「はーそこー。じゃくせに紛れて変なこと言わないー」というが、コウ「」の名前を知つてゐつてことは、全部事情を知つてゐつてことじゃないー」

「なんのことかなあ……じゃあねつコウ『』」

そうして、美少女はアレカの部屋から出ていった。そして……。

「ちょっと待ちなさい、兄さん！」

た。  
そう叫びながら美少女を追いかけてアレカも部屋から出ていつ

ていうか、兄さんつて……。

## 第一章 Prologue 「美少女」（後書き）

男の娘登場です www

おとボクファンとして、男の娘は必要でしょ?  
まあその、正確には男の娘ではないんですけどね……次回で恐らく  
説明します。

さて、アレカさん家の家族構成もいよいよ明らかになりますよーー!

## 第一章 Prologue 「パーク」

俺は呆然と立ち尽くしていた。

なぜって、それはアレカの妹さんが快活な美少女かと思つたら、その美少女がアレカの「お兄さん」だと知つたら驚かない人はいるだろうか？いや、いない。

どう見たつて可愛い女の子だったもん。

そりや、エロゲーでは男の娘によく出会つた。可愛いとか思いながら、萌えーとか言いながら、画面を凝視してるさ。

でも、そんな幻想種が現実に現れたら呆然とするしかないだろうよ。

といふか、もしかしてこの一段ベッドってアレカとお兄さんの……。

つてことは、お兄さんとも共同生活！？

「ただいま帰りました。あれ、姉さん帰つていののですか？」

部屋の入口を見ると、学校の制服らしき服を身に纏つた、清楚で可憐な美少女が立つていた。

「あら、あなたはもしかして……」

「あつ……その、篠宮雄伍です」

俺は予想外の事態に、思考の切り替えが間に合わず、状況を処理しきれずについた。

「「コウゴさんですね。お会いできて光栄ですー。」

「……はい？」

ただでさえ、新しい女の子が現れて混乱しているところの、「元の」会話にもついていけなくて大パニック状態である。

「認識阻害を破つてアルテミスに来た普通入つてコウゴさんですかね？」

「……ああ、そうだけど」

よく分からぬが、この子は俺のことを知っているらしく。そして、先ほどの「姉さん」という発言を考えると、彼女こそアレカの妹さんなのかもしれない。

「素敵ですー！普通人がアルテミスにこらつしゃるなんてー！」

目の前の女の子は、凄いはしゃぎっぷりで、俺の手を両手で握つてブンブンと振り回している。

「本当に夢みたいです」

「ちーらーじそ夢みたいだ。妹さんをじっくり見ると、アレカに負けず劣らず、モデルとしてもトップレベルではないかと言えるほどに美人である。しかし、そこに清楚な空気を纏つっていて、アレカとは

対照的である。

「姉さんが来る前に済ませてしまいませんと……」

妹さんはそつぱつと、急に俺を押し倒してきた。

「あの、ちょっと失礼しますね」

そして彼女は俺の上にまたがると、顔を近付けて来た。

「…………え？ は？ …… はい？」

そして、彼女の唇が俺の唇と重なりあつたのだった。

“ プシュン ”

身動きができるず、美少女とキスをしていると、アレカが目の前に現れた。

アレカと目が合ひ。

その間、およそ一秒も経っていない。しかし、その一瞬が俺には悠久の刻に感じられた。

「ちよっとアントナ、何やつてるのよーーー。」

アレカの強烈なビンタで現実に引き戻されたのであった。

## 第一章 Prologue 「パーカー」（後書き）

真の妹、登場です！！

アレカさん家は三人兄妹の五人家族ということで、しかも皆魔術のエリートなんですよ！！

長男は男の娘、長女はシンデレラ、次女は洋製ヤマトナデシコ

まあ、その三人とも魔術はすげく優秀なんですが、バラエティー豊かにオタクであることも、後々判明しますwww

さてさて、気になる前は次話で！ではでは

## 第一章 Prologue 「姉妹喧嘩」

「何してるんですか、姉さん！！」

「何って、アンタたち何してるのよー！」

いや、一人とも……それ、俺の台詞……。

「ユウ」さんに暴力を振るうなんて最低です

「アンタこそ、初見の男性にいきなりキスするとか、何考えてるの？」

何故か当事者の一人である俺は蚊帳の外にいたりする。

「わたしは仕方がないじゃないですか。ユウ」とバスを繋ぐにはキスが一番手っ取り早いんですから」

「ばつ……アンタまさか、ユウ」とバスを繋いだの？」

「当たり前です！魔術師相手では魔術抵抗が働いて簡単にはバスを繋げないのは姉さんも知っていますよね。その点、普通人であれば少し精神に干渉できれば、容易にバスを繋ぐことができるんです。それにユウさんは男性でわたしは女性。ユウさんを動搖させるにはキスが一番手っ取り早いんです」

「だからって、なんでユウ」とバスを繋ぐのよ」

アレカがそう質問すると、妹さんは頬を紅く染めて答えた。

「あいつとコウゴトさんのがわたしの運命の人だと思つて」

ヤバイ……俺、いつの間にかモテ期がやつてきてるのか？

「アンタの能力は制限されているのよ。上級クラスに上がったのに、アンタに許されたバスを繋いで良い人数はたつたの「一人だけな」。その「一人目をコウゴトにするなんて、何を考えているの」

「そんなのわたしの勝手じゃないですか。姉さんなんて、地上に下つて誓約執行者になつていてるのに、わたしがコウゴトさんとバスを繋ぐ」とはいけないんですか？」

最早俺では手がつけられないほど、一人の論争は白熱していた。

「悪いわよ。アンタ、コウゴトの許可は取つたの？もし、無許可だとばれたら誓約執行者になるわよ」

「許可なら取りました。ねえ、コウゴトさん」

いや、許可なんてしてないと思つんだが……。

“コウゴトさん、お願ひします。わたしの話に乗つてくださいませんか”

妹さんの声が脳に直接響いた。なるほど、これがバスを繋ぐといふことなのだろう。

「あ…ああ、確かに許可したけど」

俺も心が弱いな。

「嘘よ。そんなはずないわよー。」

「めんな、アレカ。俺ぞ、美女の頼みは断れないんだ……。」

「そういう事なので、姉さんに文句を言われる筋合にはありませんので」

「…………わかったわよ」

アレカはすっかり落ち込んでしまい、黙り込んでしまった。

「コウゴさん、ご挨拶が遅れました。わたしは、水のアレカの妹の幻視のセレナと申します。よろしくお願ひしますね」

「ああ…………よろしく」

「ふふふ。コウゴくんは、もう私の妹たちと三角関係を作ったのね。私も混ぜてもらおうかしら」

いつの間にか、アレカやセレナより小柄な美少女が俺たちの背後で座っていた。

「私はアレカたちの兄の、変幻のクリスティアンよ クリスト呼んでね。ほらコウゴ、呼んでみて」

「えつ…………く、クリス…………さん」

「ん、もう、照れちゃって でも、可愛いから許す

クリスさんは本当に、何も知らなければ笑顔が素敵で明るく活発な美少女なのに……。

「……兄さん。いい加減元の姿に戻つてください」

アレカが睨みを利かせるとさすがにクリスさんも懲りたようだった。

「えー。いいとこなのに。じゃあいっくよー  
くるりんマジック  
かーわれっ、えいっ！」

アレカのお兄さんは凄く恥ずかしいセリフとともに、お兄さんの服はリボンがするすると解けるように脱がされていくと未成年にはよろしくない際どい格好となり光りだして、スース姿になつた。ただ、髪型は変わったものの身長や体格や顔は変わっていない気がする。

「改めて、僕はアルテミス治安管理局員機密部隊所属、変幻のクリステイアン。よろしく頼むよ、コウゴくん」

「えつ……あつ、はーーよろしくお願ひします」

クリスさんに差し出された手を握り握手をした。あまりのギャップに戸惑つてしまつたのだが……

「あはっ、コウゴと握手しちゃつた」

やはつじつちが本性らしさのこと、ショックを隠せない俺であ

つ  
た。

はあー。本当に波乱に満ちた生活になりそうだ。

## 第一章 Prologue 「姉妹喧嘩」（後書き）

幻視のセレナさんと変幻のクリスティアンくんですーー！  
クリスさんはともかく、セレナさんは完全にアレカさんのライバル  
ですね。

年下妹キャラのセレナさん／＼我らがシンデレアレカさん

ユウゴ君は、セレナさんに精神を、アレカさんに肉体を乗っ取られ  
ていますからねww  
まあ、勝負は五分五分。僕の気分次第ですねwww

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1179m/>

---

Blue Sky Fantasia

2010年12月19日13時41分発行